セカンドトランス

海崎 詩響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セカンドトランス

【Ｎコード】
Ｎ０５２４Ｘ

【作者名】
海崎　詩響

【あらすじ】
目が覚めるといきなり死んでいた篠崎　諒が気まぐれな門番「薫」に出会い転生するが、余計な能力をつけて転生させる。
その能力に振り回される、恋あり？エロあり？バトルあり？ドタバタ物語です。

第1話

プロローグ

俺の名は篠崎諒、中学3年生だ、目覚まし時計のアラームがなって、目を覚ます。

「ここはどこだ？」俺は目を覚ます、見渡しても真っ暗だった。

諒「こういう時は現実逃避だ、寝る！」

寝ようとして目を閉じていると女の子の声が聞こえた。

？「おい、起きろ。」

誰か何か言ってるな、まぁ無視だ。

？「おい、起きろ！！」知らねえな、知らねえよ。

？「何か暑いなぁ～、服脱ごうかなぁ～。」

な、何だって！？

こりゃ、起きるしか…。目を開けると満面の笑みの美しい女性がいました。何故か似合わないハンマーを持って。

？「このエロガッパ！」　諒「ぐはぁ！！！」

いきなり１０メートルぐらいぶっ飛ばされました。いきなり何なんでしょう！？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

？「全くすぐに起きないからだ」彼女は仁王立ちで言う。

完全に目を覚ました（覚ますしかない）俺は、彼女から正座で説教をうけていた。

諒「あの～…、」

？「何だ、エロ魔神」

おいおい、会って僅か数十分でカッパから魔神へ昇格しちゃったよ。

諒「ここはいったいどこで貴方はいったい誰ですか？」

？「ここは三途の川の中間点だ。それで私はここの門番の薫だ」

第2話

諒「はぁ～、つまり俺は死んだと…、お休み。（薫って名前マジかよ似合わねぇー（笑））」
薫「ほぉー、貴様はまた殴られたいんだな（笑）あと、名前を馬鹿にするな」
バキッ！！
諒「もう殴ってるじゃん！！つ～か何で心の声読んでるの？」
薫「うるさい！！お前の状況分かってるのか！？」
諒「まぁ、アレだよな、俺は死んでるんだよな、確かこうなったのも家に強盗が入って、犯人がナイフを振り回してナイフを姉貴に向けたから無我夢中になってたら姉貴をかばって俺が刺されて死んだんだよな」
薫「分かってたなら、何故ボケた！？」
諒「まさか厨二的展開になるとは思えず（笑）」
薫「お前、アホなのか賢いのか分からん…。まぁ、改めてだがお前はお姉さんをかばって死んだ。本来なら天国に行くんだが…。」
諒「行くんだが、どうしたんだ？」
薫「現世にもう一度生まれかわれ。」

はい？今なんつった？
薫「聞こえなかったか、もう一度生まれかわれ」諒「理由が分からない！つ～かどうやって！？」薫「理由は気まぐれ、生まれかわるには川を泳いで下ればいい」
うわぁ、まさかの気まぐれ…、いいのか門番…。
薫「時間がない！！早く行けっ！！」
ドンっ

えっ…、まさか…。
諒「マジかよ〜！？薫もう一度来たらお前を殺す！！」
こうして諒は流されていった。

第2話（後書き）

簡単にですが、プロフィールです

篠崎　諒

身長１７２ｃｍ

体重６０ｋｇ

Ａ型

年齢１５歳

外見

髪色は黒

髪型は武装錬金の武藤カズキ

目の色は黒

顔は上の下

性格

明るく誰とでも馴染める性格。どんなボケもツッコムツッコミ担当。

時には空気を読まないボケや天然ボケを発動する。おせっかい。

追加性格

エロ魔神…一定のエロレーダーを越えるとエロ魔神化する。

薫

身長１６３ｃｍ

体重４４ｋｇ

Ｂ型

スリーサイズ

８６／５０／８３

髪色は青

髪型はリトルバスターズの西園美魚

？？歳

性格気まぐれ。とにかく気まぐれ。気に入らなかったら、殴る。（ただし門番の時のみ）

通常時誰にでも優しく接する。時々諒に対し冷たい言葉を言うが陰ながら諒を心配している。通称ツンデレ。可愛いもの好き。心を許したものには極端にデレる。

第3話（前書き）

最近暇でくだらないネタが思い付きます（笑）文章に自信がありませんが出来る限り毎日更新していきたいと思ってるのでよろしくお願いします。

第3話

？「おはよう～朝ですよ～。」

（あ、俺転生したんだな。あいつめ、今度あったらぶっ飛ばす…。）

？「ねぇ姉さん。起きてくださいよぉ～…。」

（誰か呼んでるけど関係ないな、だって俺は男の子だし（笑））

？「起きてよ」
バジっ！！

諒「痛っ！何だこれデジャブ！？」

？「やっと起きたよ～、おはよう姉さん」

諒「いやいや、待て俺は君の姉さんじゃないから。つ～かそれ以前に俺は男だ！！」

明「また～、寝ぼけちゃって～、あなたは柊諒華（ひいらぎりょうか）で、私は柊明（ひいらぎあかり）であなたの唯一の妹じゃないですか！」

イマナンテイッタ？

諒「ゴメン、モウイチドイッテクレ」

明「だからあなたは私の姉であなたの名を諒華、私が明です！！」

諒「はいっー！？」
（まさか肉体が思いっきり変わるなんて…。まぁそれよりも、改めて確認したいな）
諒「あの、明さんとりあえずいくつか頼みがあるんだけど、まず鏡を持ってきて、それでここの住所と俺の歳を教えて」

明「何かよそよそしいし変な姉さん、ちょっと待ってて」

そういうと明は部屋を出ていった。

諒「状況を確認しよう、俺は死んで、三途の川の門番に会って、薫の気まぐれて転生した。転生したのはいいが俺は何故か女になっていた」

（ＯＫ～ＯＫ、ここまで厨二的展開で大丈夫だ。だが、何故女！？）

薫「それはね～私の気まぐれ（爆）」

諒「いきなり出てくんな！ビビったじゃねぇか！！！」

明「何！？どうしたの！？一体何が……、あんただれ？」

第４話（前書き）

少しだけ長めです。
だけど駄文です。
早くうまくなりたいなぁ～（T_T）

第４話

テーブルにはいきなり現れた薫、明、そして諒がいる。明が諒の隣に、そして薫がいる。無言のまま３０分経過していた。

諒「（辛い！この空気辛すぎる）」

薫「私の名前は薫と言います、君のお姉さんの諒華さんに話があって来ました。ちなみに私とお姉さんの関係は友達です」

諒「待て！誰がお前のとも…（黙れエロ魔神）…、すみません、何でもないです。」

明「なぁんだ、お友達だったんですかぁ～、ご迷惑おかけしました（笑）」

薫「こちらこそすみませんでした。あの少しだけ諒華さんとお話したいので外してもらってもいいですか？」

明「分かりました～、ごゆっくり～」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

諒「お前いったい何なんだよ！」

薫「いいツッコミ！んでまぁ、時間がなかったから状況説明出来なかった、ごめんなさい…。」

諒「わかった、もういいからこの状況を教えてくれ。」

薫「君には本当に悪い事をした、こうするしかなかったんだ…。ごめんなさい…。」

諒「どうしたんだよいったい！？」

薫「君には1から話さないといけない、長くなるが聞いてほしい」
薫の話を聞くには、本来俺は死ななくてもよかった。だが神様のミスで殺す人間を間違えて俺は軽いケガですむのが死につながってしましたらしい。
三途の川で薫に会ったさい、神様がそのミスをごまかしてそのまま天国に連れていかそうとしたから、その神様を許せなかった薫が俺を再び生かす為に川に落としたらしい。

薫「それで君が女の体の理由だけど、それは体が変わったら面白いから！」

諒「お前シバくぞ！」

薫「まぁまぁ。それで今の状況だけど君の性格はお嬢様系だけと偉そうじゃない感じ。つまり優しい感じ。君は5人家族で3人姉妹の次女になってる。だけど、君は本当の家族ではなく、両親姉妹共に義理。よかったな！」

よくねぇよ！

薫「んで今は3月で君は１５歳で中3で今年高1になり私立の女子校に通う設定だ」
何だと！？女子高校生になるだと！？んじゃあんなことやこんなこと…（バキッ！）はい、殴られました。
薫「それで姉の名前は瑞希１６歳４月で高2、んで妹が明１４歳で４月で中3だ。」
まぁ何となく状況がわかった。
薫「それで君は気づいてなかったと思うが自分の胸を見ろ。」
胸？おぉ！かなりデカ…、（バキッドスッ）また殴られました。
薫「違う！ネックレスだ！」
言われてみて見てみると十字架のネックレスをつけていた。

薫「それを外してみて。」
そう言われて外すと本来の男の状態に戻った。
諒「よっしゃ～！元に戻った！」

薫「話を最後まで聞いて。君がネックレスをつけている理由についてなんだが、最初に私の気まぐれで体を変えたって言ったがアレは９割嘘だ。君の、諒としての体はもう死んでいた。なのに男のまま生き返したら体が死んでいるから生き返してもすぐに死んでしまう。だからそれを防ぐ為に、そのネックレスをつけると女になる魔法をかけたんだ。そうしたら君は女としては死んでない状態だからな。ちなみに外しても生活出来るがよく持って1日だ。1日過ぎると体が朽ちるから気をつけて。あと、もう1つネックレスを絶対に水に濡らすな。」
諒「何で？」
薫「水に濡らすと魔法が一時的になくなり男に戻ってしまうからだ」
ら〇ま1／2かよ！
薫「ちなみにその魔法、消えたら１２時間は元には戻らないからな」
諒「めんどくさいが、まぁわかった。」

薫「悪い、忘れてた。水に濡らすなより大事な事だ。諒を知ってる人に諒華が諒って事を言うな。死者が生き返るのは本来タブーでバレたら、私とお前は死ななければならない。私が死ぬのは構わないが諒を2度も死ぬのは嫌だからさ。だから私は言わないし君も絶対言わない事。いい？」
諒「わかった、絶対に言わない。俺が死ぬのは構わないが薫が死ぬのは嫌だからな。」
薫「な、何言ってるんだよ、意味分からないし！お前は心配しなくていいから！っていうかそういう事言われても嬉しいわけないんんだからね！」うわぁむっちゃ早口（笑）
薫「まぁとにかく以上の事は守ってね。それで君にはチート能力をつけました。何か質問は？」

諒「とりあえず大丈夫。あとは自由に気ままに過ごすよ。んで薫、チートつけるな！」
薫「いいツッコミだねぇ～！！まぁチートって言っても成績がトップランク、運動神経抜群、おまけにスタイル完璧なだけだから（笑）」
諒「そのチートならよし！大歓迎！」
薫「いいのかよ！あぁ…、私がツッコンだ…。」諒「まぁそれは置いといて薫に言いたい事がある。生き返らしてくれてありがとう。」
薫「なんでお礼を言うんだ？君は私を恨んでもいいはずなのに。」
諒「君にうらんでも仕方がないし、あとどういう結果であれ生き返らしてくれたんだ。俺の為にやってくれたんだ、本当に嬉しかった。だからお礼を言いたかった。ありがとう。」
すると薫は泣きはじめた。
薫「どうして君は優しいのかなぁ…。巻きこんでしまったのに…。」
諒「もう気にしてないから、大丈夫。ありがとな。」
アレ、薫震えてる、大丈夫かなぁ。
薫「ありがとう！」

いきなり抱きついて来た。うぉ！胸が顔に！胸が顔に！嬉しいけど苦しい～！

薫「あ、馬鹿っ～（照）！！」

またぶっ飛ばされたよ、どれだけぶっ飛ばされたらいいのかなぁ～（T＿T）

第４話（後書き）

今回は説明が長めです。うまくまとめれるようにがんばります。
あと駄文をみてくださった人の中でアドバイスがあったらお願いします。

学園編は次かその次までには載せるつもりです。

第5話（前書き）

題名を変えました。
くだらない妄想ネタはよく思いうかびます。
温かい目で見てください。

第5話

薫「…ごめんなさい。」
諒「もういいよ、君に殴り癖があるのが分かったから。」
薫「本当にごめんなさい…。そう言えば、まだ学校について説明してなかったから、説明するけど、学校名は私立水代女子高等学校と言って、君の今のお姉さんも通っている所であそこは寮生活となっていて入学してすぐのテストの結果で寮の部屋が決まるから。ちなみに、3位までになると専用の個人部屋になるから。それ以外は誰かと一緒の部屋だから君は3位以内に入らないと秘密バレやすくなるから何が何でも頑張れ！」
諒「何っ！？んじゃいきなり頑張らないと死亡フラグ立つ訳！？」
薫「悪いけど、そうなっちゃうから。だけど今の君なら大丈夫だから！そろそろ時間だから戻らないといけないからさ、何かあったらまた教えて。ごめんけどそれじゃ！」　諒「あ、おい！行っちゃったよ…。まぁとりあえずテスト頑張らないとまずいな…。」
いきなり悩まされる諒であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　４月入学式
諒「ここが今日から通う学校かぁ、ここで諒華として生きるのかぁ～」

（そう言えば友達今０じゃん、やっていけるのかなぁ～…。）
？「おはよう！」
諒「あ、うんおはよう」？「あなたの名前は！？」
諒「（いきなり何なんだ！？）え～と柊　諒華です。」
春「いい名前だねっ！私は春野千春（はるのちはる）あだ名はあなたに任すね！」
諒「う、うん…。（何か　偉く積極的だな）
春「私中学の時の皆と違う学校に来たからまだ友達いないんだ、だから友達になってね！」
諒「う、うん…。（もう友達出来ちゃったよ）
春「さっきクラス表見に行った際に同じクラスだって知って諒華を見つけたから声かけたんだよ～！」
諒「何で私が諒華だって分かったの！？」
春「だって『諒華として生きるのかぁ～』って言ってたからさ（笑）でも、何か変な感じ、新しい名前をもらった感じのセリフだよね。」
（ギクッ！妙に鋭い！コレはマズイ…）
春「まぁいいや！クラスだけど１組だよ」
諒「（いいのかよ！）そうなんだぁ～ありがとう～、んーと春野千春だから…、んー、ちーちゃんって呼ぶね。」
ち「分かった！んじゃよろしくね、諒華！」諒「んじゃ入学式始まるから向かおうか！」
ち「了解！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

諒「やっと終わった～…。」
ち「長かったねぇ～…。でも、次が大変だよ、テストが5教科もあるからねぇ～…。」
諒「そうだった！まぁやるしかないよね」
ち「そうだよねぇ～、んじゃテスト頑張りますか！最初は国語だって。」諒「わかった（本当に勉強チートついてるのかなぁ…）」

～教室～
先生「ではテストを始めてください。」
諒（うわぁ、難っ！こんなの無理！解ける訳…アレ、意識が…。）
～テスト全科目終了～
先生「ではテストは以上で終わりです。寮分けは明日発表されます。明後日からその寮に全員住んでもらいます。なので、荷物を明後日持ってきてください。ちなみに学年上位3名は専用の個人部屋になります。それ以外の寮は全クラスが対象となってます。別のクラスの人とも一緒になるかもしれませんが、仲良くするように。あとテストで著しく点数が低い人は補習もあるので忘れないように。では、気をつけて帰るように。」
諒「コレはまずい…。やっちまったパターンだ…。ｏｒｚ」
ち「諒華テストどうだった…って、どうしたの！？ｏｒｚみたいな恰好しちゃって！？」
諒「意識なくしてテスト書いた記憶がない…。
ち「あ～…。その、ドンマイ…。赤点回避してるかもしれないし、まぁ明日だよ！」
諒「うん…。んじゃ帰るね…私。」
ち「んじゃバイバ～イ。」
～家～
明「姉さん、テストどうでした！？」

諒「聞くなｍｙ　ｓｉｓｔｅｒ。」明「まぁ補習なったとしても、姉さんならやりきれますよ！」
諒「そうかもね…。部屋戻るから。あとご飯いらないから、もう寝る。」
明「ね、姉さん！？」
諒「お休み…。」
バタンッ
明（姉さん、テスト出来なかったのがやっぱりキテるんだなぁ…。よし、明日は姉さんの好きな物をつくってあげよう！）
～諒華の部屋～
薫「お帰り～！テストどうだった！？ってどうした！？」
諒「あ、薫来てたのか…。意識なくして書いた記憶がない。」
薫「いきなり現れたのにツッコミなしとは重傷だな…。まぁ大丈夫だって！明日を楽しみにした方がいいって！」
諒「ソーデスネ。タノシミニシテマスヨ、ンジャオヤスミ。」
薫「寝るな！」
知らねぇ～な知らねぇよ。現実逃避するし

第5話（後書き）

こんな駄文を読んでくれている人がいるのか少しだけ不安になってきました。それでも、書き続けます！
プロフィール第2段をやりたいと思います。
柊　諒華（篠崎諒女時）
身長…諒と同じ
体重…４７ｋｇ
髪の色…諒と同じ
髪型…ロング（時々ポニーテール）
スリーサイズ
８８／５５／８６
性格…諒と同じ

柊　明
身長…１５３ｃｍ
体重…？？ｋｇ
髪の色…金色
髪型…天神乱漫に出てくる千歳君の妹さんを想像してください（名前を度忘れしましたｏｒｚ）
スリーサイズ
７４／５２／７０
性格
姉思い。少しシスコン気味。お気楽で若干大雑把で細かい事を気にしない。

今回はここまでにします。春野千春のプロフィールを発表しようにも春野さんの感じがまだ想像できてないからまだ言えません。決まり次第載せます。あと、柊家の詳しい家庭内容ですが柊家は５人家

族ですが、家には諒と明の2人しかいません。両親は海外で仕事をしている為、滅多に帰れません。一番上の瑞希は寮に住んでる為、いません。料理は諒もそこそこ作れますが明がかなりウマイ為、毎日明が作ってます。明が早くご飯を作らないといけない為、明は帰宅部です。諒は転生前は弓道部でした。瑞希の入ってる部はもう少し先で発表します。

どうにかまだネタは思いくけど、いつネタがなくなるか不安です…。

第6話

諒「ふわぁ～、よく寝たぁ～…。」
薫「やっと起きたね」
諒「来てたんだ？」
薫「違う！ずっとこの部屋にいたっ！」
ナンデスト！？
諒「なら俺はお前がいるなか、寝てたのか…、ゴメン。」
薫「いいよ！気にしなくて！だって…（だって寝顔見れたし）」
諒「（何か顔赤いし、最後まで聞き取れなかったけど大丈夫だよな）」
薫「それより学校行かないのか？」
諒「そうだったな、んじゃ着替えるかな、んで薫は帰れ！」
薫「え～何でぇ～？」
諒「そりゃ着替えを見られたくないからだ！」
薫「私は気にしないから」
諒「俺は気にするから！お前も見られるの嫌だろ！？」
薫「諒なら別にいいけど」
諒「言い切った！？（俺はこいつにどんなフラグたてたんだ？若しくは男として見られてない？）
薫「じ、冗談だよ気にしないで！（照）って何へこんでるの？」
諒「男の事情だ、それより急がないとかなりマジでマズいから！」
薫「分かってるって、んじゃ学校で！」
諒「ハイハイ、サイナラ。ん、学校？まぁいいや急がないと！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　～学校～
ち「諒華～おはよう！」諒「おはよう、今日だね、結果…。」
ち「そういやぁ～そうだね、まぁ補習だけは回避したいね（笑）」
？「おはよう、諒。」
諒「おはようって、お前は！？」
薫「はいはい～！薫ちゃん華麗に参上！（ドカーン！！）」
諒「ちょっ、お前こっちにこい！」
薫「いやん！諒が引っ張る～！」

～トイレ前～
諒「何でお前が制服着て学校来てるんだよ！？あと後ろのセット準備するな！」
薫「ねぇねぇ～、この服似合う～？」
諒「（駄目だ、こいつ話聞いてねぇ）ハイハイ、似合ってますよぉ～〈棒読み〉」
薫「そ、そうか。よかった（照）」
諒「何故照れる？まぁそれより何故ここにいる！？」
薫「それはあなたを監視する為よ、うっかり秘密を言わないようにね。ちなみに昨日からいたわよ。」
諒「マジで！？ってよく学校の生徒になれたな～…。」
薫「あぁーそれは私の力を使って…『そんな事に使うなぁ！』」薫「まぁそういう事だから。あと私の本来の年齢１０００歳以上だけど、ここではあなたと同じにしてるから、肉体も。」　諒「じゃないとマズいだろうな、実際は１０００歳以上で高１はないな。」
薫「そういう事。あとまだ名字言ってなかったけど、神崎ね、神崎薫覚（かんざきかおる）えといて。」
諒「了解。んじゃ教室戻ろうぜ。『ラジャー』」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　～教室～

ち「おかえり～、まさか2人が友達だったとは知らなかったよぉ～！」
薫「ごめんなさい、説明が遅れていました。諒華さんと家が近所だとつい最近知り、仲良くさせて頂いてます。」
ち「なるほどぉ～、んじゃ友達の友達は友達だね！これからよろしくね！」
薫「はい、よろしくお願いします、千春さん！」　諒「（何で丁寧語なんだ！）」
薫「（第一印象は大事だからよ）」
ち「？？？まぁ、そろそろ席についた方がいいかも、先生が来るし。」
諒・薫「了解」

関「みんなおはよう！今日から担任の関野　舞（せきのまい）です～。よろしくねぇ～。まぁ今日はＬＨＲの後はテスト結果発表で終わりだから緊張しないでいいからね！んじゃＬＨＲ始めるから、まぁ今日は自己紹介！出席番号１番から簡単にどうぞ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　関「終わったねぇ～。んじゃテスト結果発表されるからちゃんと放送聞いてね！ちなみに私は補習対象者しか結果を知りません！だから放送終了後に言うから！」
「ただ今より１学年のテスト結果発表を行います。名前を呼ばれたものは放送終了後に職員室へ来るように。まず、第３位　４９５点（あ）
秋月恋（きづきれん）。」
諒「秋月！？」
薫「いったいどうしたの？」
諒「あいつは俺が死ぬ前にいた学校のクラスメートなんだよ。まさかあいつがここに来てるとは…。」
「第２位４９８点神崎薫」
諒「何高い点取ってるの！？」

薫「こう見えて勉強出来るのよ！」
ち「神崎さん凄いよ！2位になるなんて！」
「では第1位５００点柊諒華。以上で放送を終わります。」
クラス「えぇ～！」
諒「ナンデスト～ッ！？」
関「それじゃ、神崎さんと柊さんは職員室に行ってね！んじゃこれからは補習対象者を発表するよぉ～！！」
クラス「いやっ～！！」　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　～職員室～
諒「まさか意識がなくなってたのにテストが出来てたとは…。」
薫「これが私が使ったチートだよ！」
諒「感謝するよ、ありがとう。」
薫「どういたしまして。職員室に着いたから、後は秋月さんを待とうか。」
諒「あ、あぁ…。（まさかあいつと会うとは…。絶対バレないようにしないとな）」
秋「すみません、お待たせしまし…た…。！？あなたは！？」
諒「（まさか俺の正体気づいたのか！？）」
秋「テストで５００点を取った柊さんですか！？」諒「（何だよ焦らせるなよ！）まぁ、うん。」
秋「凄いです！憧れです！」
薫「コホン、そろそろ職員室入らないか？」
秋「すみません！それじゃ入りましょうか。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　～教室～
諒「コレがウルズ部屋の鍵と青い腕章かぁ～。」　薫「私はヴェルザンディ部屋の鍵と赤い腕章で恋ちゃんがスクルド部屋の鍵と黄色い腕章だったよね。」
諒「かなり恥ずかしいんだが…。」
薫「だけど着けているといろいろと便利じゃん！」
腕章をつけてる物は食堂や売店などでも優先的にする事ができ、１年間授業料免除、持ち込める私物の緩和化などなどいろいろとある。

諒「だがなぁ…。」
ち「いやぁ～、2人とも凄いよ！！今度からテスト対策には頼るよ！」
薫「任せて！千春さんはテストどうだった？」
ち「ギリギリだけど回避出来たよ！！」
諒「よかった～！まぁテストの話は止めて授業終わったし部屋を見に行かない！？」
薫・ち「賛成！」

第６話（後書き）

プロフィール第３段
春野千春
身長１６０ｃｍ
体重？？ｋｇ
年齢１５歳
髪色茶色
髪型テイルズオブヴェスペリアのリタ
スリーサイズ
８０／５８／８６
性格
ムードメーカー。ポジティブシンキング。家族想い

秋月恋
身長１６５ｃｍ
体重５０ｋｇ
年齢１６歳
髪色恋姫無双の呂布
髪型恋姫無双の呂布
スリーサイズ
８８／５２／８４
腕に銀色のブレスレットをしている
性格
みんなの前では頼れるお姉さん。だが実は甘えん坊で若干のネガティブシンキング。男嫌い（諒は例外）ムッツリエロ娘。　（男嫌いとムッツリは誰にも言わず隠している）

どうにか６話まで書きましたが未だに寮まで書けてません。どうに

か頑張って書いていきます。
文才を分けて頂きたいです（笑）

第7話（前書き）

このストーリーは今のところ、時間がゆっくりとなっているので未だに入学してから2日目です。

第7話

～ウルズ寮～
諒「ここがウルズの部屋かぁ～！中々に広い！って言うか個人なのに部屋４つもあって、風呂もあって、最新型テレビや、洗濯機、キッチンとかもあって、もはや、１人暮らし出来るよ！」
ち「凄っ…。」
薫「いやぁ、こりゃ、ビックリだよ…。」
諒「んじゃ次はヴェルザンディ寮だね。行ってみようか！残りの２つもすぐ近くだしね。」
～ヴェルザンディ寮～
諒「あんまり変わらないけど、部屋が３つあってウルズは部屋の感じの色が青や紺などの落ち着いた感じでここは部屋の感じの色が黄色や橙色だね。」
薫「んじゃ～、スクルド寮に行ってみよう～！多分秋月さんに頼めば見せてもらえるよ！」諒「そうかもね…、ゴメン、私疲れたからもう帰るね、明日から寮になるから準備しないといけないからさ。」
ち「そうかぁ～、んじゃまた明日ね！」
薫「…。」
～スクルド寮～
秋「あ、神崎さん！え～と、どうしたの！？あとあなたは？」
ち「私は春野千春って言います！薫や諒華の友達です！」
薫「ゴメンね秋月さん。ちょっと各個人寮の見学してたんだよ。んでスクルド寮も確認しようと思ってね。」
秋「なるほどぉ～。いいですよ！そう言えば柊さんは？」
ち「諒華は今日は帰っちゃったんだよ、何でも明日の荷物の準備をしないといけないらしくて。」　秋「そうですかぁ～…。残念です…。」
薫「次は諒も呼んでくるよ。」ち「そう言えば薫って諒華を諒って

呼んでますけど、何ででですか！？」
薫「単純に諒が言いやすいから。」
ち「そんな単純理由！？」
秋「まぁそういう理由もありですよ（笑）今度から諒さんって呼ぼうかな。」
薫「いいと思うし喜ぶぞ　。あ、そうだ次から私を薫って呼んでくれ。」
ち「んじゃ私も好きに呼んでいいよ、ちなみにちーちゃんか千春って言われてる。」
秋「分かりました！では、薫さんに千春さん、私の部屋を見せますね！」　薫「へぇ～部屋は２つで基本は変わらず、あと部屋の感じは赤色やピンク色って感じだね。」
秋「はい！結構気に入ってるんですよぉ～！他の寮はどんな感じなんですか！？」
ち「基本は変わらず、ヴェルザンディは３部屋でウルズは４部屋で後はそれぞれ部屋の色が違うくらいかな。」
秋「そうなんですかぁ～。今度見せてくださいね！」
薫「いいですよ。」
ち「にしてもいいなぁ～こんないい個人寮なんて！！私はワンルームでその部屋に他の人がいる感じだけど、まぁそっちの寮見ると悲しくなるよ」秋「まぁまぁ、遊びにいきますから！そう言えば私の事今度から恋って呼んでください！」
薫「わかった、これからよろしくね恋さん。」
ち「よろしくね恋ちゃん！」
恋「はい！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　～諒～
俺は薫やちーちゃんと別れて帰っていた。
「まさか秋月がこの県にいたとはなぁ…。」俺が死ぬ前に中学にいた県と今の県は違う。なのに、秋月と出会うのは本当に予想外だった。

「あいつ引越ししてたんだなぁ…。それにしても、まだあいつ持ってたのかよ。」
中学の頃に誕生日だった秋月に渡した銀色でシンプルなブレスレット。まさか未だに持ってしかもつけているとは思わなかった。
「だが、俺が生きている事は言えないな。今は諒華だから…。何だろ、この気持ち…。訳分からんな、よし家までダッシュで帰るか！」
多分今日のテスト結果に未だに驚いてるんだな！早く帰ろう！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　～恋～
薫「ゴメンね秋月さん。ちょっと各個人寮の見学してたんだよ。んでスクルド寮も確認しようと思ってね。」
部屋の確認をしていると、神崎さんと友達さんが来ました。何でも見学したいらしくて来たらしいです。恋「そう言えば篠崎さんは？」
ち「諒華は今日は帰っちゃったんだよ、何でも明日の荷物の準備をしないといけないらしくて。」　秋「そうですかぁ～…。残念です…。」
薫「次は諒も呼んでくるよ。」
恋「（諒っ！？何で諒の名前を知ってるの！？）」
ち「そう言えば薫って諒華を諒って呼んでますけど、何でですか！？」
薫「単純に諒が言いやすいから。」
ち「そんな単純理由！？」
恋「（何だ、ただそれだけの理由か。）まぁそういう理由もありですよ（笑）今度から諒さんって呼ぼうかな。」
薫「いいと思うし喜ぶぞ　。あ、そうだ次から私を薫って呼んでくれ。」
ち「んじゃ私も好きに呼んでいいよ、ちなみにちーちゃんか千春って言われてる。」
秋「分かりました！では、薫さんに千春さん、私の部屋を見せますね！」　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2人が見学を終えて帰った後は、諒華さんについて考えていました。

「諒って聞いた時は焦っちゃったよ、だって諒は死んじゃったんだよね…。ねぇ…、何でいなくなっちゃったの。ブレスレットのお礼言えてなかったし、私はあなたに…。」
諒の事を考えていたらいつの間にか涙が出てました。諒に会いたい。諒にお礼を言いたい。そして私の気持ちを伝えたい、私は諒が好きって事を。「まだふっきれてないなぁ～、早く立ちなおらないと。あ！そう言えば私もまだ明日の準備してない！早く帰らないと！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　～柊家～
諒「ただいまぁ～」
明「お帰り、姉さん！テストは、どうだった…？」
諒「それが、まさかのテスト全部満点だった。」　明「…。」
諒「おい、明！どうした！戻ってこ～い、明！」　～15分後～
明「それで、姉さんは満点取って学年1位になって青い腕章をもらったって事ですよね。」諒「そういう事。」
明「姉さん凄いです！瑞希姉様と同じ1位ですね！！！」
諒「瑞希姉様？」
明「あれ、聞いてないですか？姉様は4月のテストで1位をとり、1年と2年では1位しか取ってないんですよ！！！」
諒「（チート能力がなくても天才はいるんだな…。）凄いね…。」
明「姉さんも姉様みたいにがんばって！！！」
諒「努力はするよ…。」　明「とりあえず、ご飯にしましょう！今日は姉さんの好物ばっかり作りましたよ！」
諒「わかった、早くご飯にしよう！！！」
～風呂～
諒「いやぁ～、明のご飯うまかったなぁ～！！！にしても何か肩がこってるなぁ～、もしかして女状態だと胸があるからその影響かなぁ～。」
明「…さん～…、話……すよ…。」
諒「参ったなぁまだ、女の体に慣れてないなぁ～…。」
明「姉さん～、電話ですよ～！！！」

諒「ん、何か聞こえる。」
明「姉さん！！電話！！！ドア開けますよ！？」諒「マズイ！バレる！急がないと！！！」
ガチャ
明「姉さん！！電話！！って姉さん！！何素っ裸なんですか！！！」
諒「（あぶねぇ～！！）いやぁ、今から出ようと思って（笑）」
明「早く服着てください！！あと携帯置いときますから！！」
諒「ありがとね。」
明「いえいえ。じゃ、私は戻るから。」
諒「さ～て、誰からって、誰だこの番号？まぁかけてみるか。」
プルルルルル
諒「もしもし柊です。」薫「薫です、やっぱり秋月さんの事気にしてた？」
諒「あぁ。危うくバレそうになったからな。出来る限り関わらないようにしたいと思ってる。」
薫「それが…、秋月さんが寮を見せてくれだって。」
諒「何で断らないんだよ！？」
薫「だって恋さんのあの顔見たら何も言えな…、ゴメン、何でもない。まぁいいじゃん。部屋ぐらい見せてあげても。友達になるぐらいなら大丈夫だし、私もフォローするからね！！」
諒「わかったよ…。用件はこれだけ？」
薫「あと、ちゃんとブラジャーをつけて女もののパンツはきなさいよ。」　諒「お前、透視してるのか！？」
薫「適当に言ったのにまさか合ってるとは…。まぁちゃんと女らしくしなさい。」
諒「わかった…、努力するよ…。」
薫「そういう事だからんじゃ～ね。」
諒「薫って一体…。まぁ早く服着て寝るか。」
今日はいろいろとあって疲れたよ。早く寝よう～。

第7話（後書き）

恋について詳しい事情を話すと中学時代から諒が好きでした。だけど諒が死んでしまった事で一時期自暴自棄になってしまい、それを見た両親が引っ越しをしようと言うことになり引っ越しして今の学校にいます。

本文をちょいとまた変えました。まぁ分かりにくいと思いますが暖かい目で見てください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0524x/

セカンドトランス

2011年10月10日10時31分発行